

自己の感覚の起源について

——精神の形態学にむけて——

森 岡 正 芳

Genesis of Sense of Self

——An introduction to Morphology of Mind——

MORIOKA, Masayoshi

『我々は身体 (soma) が形をとるように、精神 (psyche) が同じく形をとると単純に仮定する。我々は単一の発達形態学を対象にしているのである。』

A. ゲゼル「行動の胎生学」序より

序 青年期における自己 (Self) の変容

「自己」「自我」のめざめ、というテーマは青年心理学、青年期臨床にたずさわるものにとって、きわめて重要な問題である。筆者も先に、この時期における自己像、自己概念、自我発達、自我機能などの概念的整理を試みてきた (森岡1979b, 1981)。

一方で、Self, Ego, Identity といった概念が、きわめて混乱した用いられ方がされている¹⁾。

ここで、今一度乳幼児期の行動形態、心理発達の諸研究をふりかえり、自己や同一性の感覚が生まれてくる始源に、ひとつのすじみちをつけてみたい。

というのは、青年期は第2の分離—個性化 (Separation—Individuation) の時期といわれるように、「依存対象との自他未分化の状態から、自他の認知が分化していく、その過程の中で、自己の表象が一つのまとまりをもってくる」という幼児期の体験を、もう一度やりなおす、といえるからだ。もちろん、青年期における自他未分の状態とは、原初の母子一体感というものと実質的に異なり、あくまで、内的な対象関係の世界で生じることである。それまでに内在化されてきた両親像と、旧来の自我理想とのつながりが一度分離され、新しい自我理想を形成していく、という過程を経る。それだけに、青年期以前に、内在化された自己—対象関係は一度弱体化し、自我の統合がこわれる危険性もある。この状態が、心理的には青年期の一過性の荒れ、「思春期危機」といった不適応状態となって、離人感や抑うつ感、強迫行為や不安感などの現象を生じることがある。

また、思春期特有の自己中心性の様々な特徴が顕在化する時期である²⁾。

しかし、この時期の自己中心的行動は、自我形成のために、自己愛的な均衡を保たねばならないという意味で、必然の過程と、解することができよう³⁾。

以上のような文脈は、最近とみに、精神分析学各派の中で注目されている、境界例や自己愛パ

パーソナリティの研究、とくに、Kohut や Kernberg の理論に帰することが大きい。

ここで用いる Self の概念も、Kohut の自己心理学 (Self-Psychology) の定義、すなわち、「人格の全体的な構成体」としての自己、「超自我、自我、エス」などの心的装置をその一部として含む広義の「自己」である。また、以下にのべる「自己の感覚」(Sense of Self) とは、「発達的な変容の中での、根源的な Sameness の感覚」と定義しておこう。

青年期臨床の中でも、自己愛パーソナリティの様々な病態（筆者は、思春期の登校拒否症、青年期特有の葛藤反応型うつ病、ステューデントアパシーなどの退却症候群のかんりの部分に、この自己愛パーソナリティ障害があてはまると考えている。）の着眼点をしぼるためにも、乳幼児期を始源とする Self の諸側面を調べるのが重要だと思われる。

まず、そのような Archaic な自己像群の発達過程を以下にのべてみよう。

I. 自己の感覚 (Sense of Self) の発達過程

Kohut (1971), Lichtenberg (1975) の諸論をもとに、人生の最早期における、Self の感覚の出現を4つの段階にわけて述べてみたい。

1. Self の分化以前の状態

何よりもまず、母子が対でしか考えられない時期がある。その共生的依存関係は、子にとって大洋的な没入 (oceanic merger) とよばれる状態である。Kohut はこの時期の Self について、母と新生児をそれ以上分割できない一つの単位 (unit) と考える。新生児の Self は、その環境との相関関係の中で徐々につくられる、諸機能、諸経験の断片的な集合である。とくに、快—不快という記憶の選択が Self の基本的な核 (Basic Core) をつくっていく。

続いて、自律的な知覚—運動機能の行使を積み重ねることによって、自分と自分でないものの区別がついてくる。そこから自己と対象が経験的なイメージとして、ある程度一貫性をもった表象構造としてあらわれる。

おおまかにいえば、これら早期の自己表象が一つのまとまった経験的自己の中に、統合されていくことが、Self の分化と心理的諸機能の形成過程である。

次に、その様々な自己表象群の分化発達の過程をくわしくおってみよう。

2. Archaic な自己像群の発達

三つの自己像群をわけることができる。

1) 身体的経験を基盤とする自己像

自己像の基盤の一つとして、本能欲求の充足を求める器官の様態、身体各部位のイメージから派生した自己像があろう。外界に接している皮膚と、内側の器官が根源的な身体像をつくる。

フロイトのリビド発達図式で、口唇期はロー舌の psychosexual な意味が重視される。ここで、身体自我 (Body-ego) の原初形態として「舌」の役割を再認識したい。発達的には、舌は、目や手以前の重要な認識手段の道具であり、対象を「味わう」手段の原理である。また、introjection, denial, splitting などの防衛メカニズムの原型ともなる。

Spitz (1957) は乳児が舌をつかって、母の乳房をおすという形で、No を表現するのを観察し

ている。

このように舌は、自己—対象関係の橋わたし、対象カセクシスの根本的な媒体となり、攻撃性や葛藤を表現する器官である。

Bonnard (1958, 1960) や Greenacre (1958) の症例のように、境界例や精神病レベルの患者の治療的退行がすすんだ場合、この「舌」の機能が、自我の統合の枠組になることもある。身体自我の活動によって、基本的リアリティが獲得され、自我境界の形成につながるわけである。

2) 対象から分化した、一つの entity としての自己像

母は子にとっていつもよい対象であるとは限らない。不快でむずかって泣いても、母がすぐに子のもとにとんでくるとは限らない。

母親の制限と子どもの意志がぶつかりあうのをとおして、子ども自身の境界ができてくる。そこで、自己と対象不在のイメージを内在化することになる。そして、外的現実と内的現実が分割してくる。

この過程が、精神内界の自律性を促進させるが、対象から独立した存在としての自己が確実感を伴うのは、次の肛門期でのやりとりを経て後のことである。

3) 肥大した自己像 (Grandiose Self)

この自己像が形成されるころは、ナルシシズムの病理を理解する一つのポイントとなる時期でもある。

この自己像は、母親の魔術的な力が子どもの万能感を高め、一つの自己の理想的状態をつくるという意味で、母子融合から生じた「Archaic な幻想」から生じてくる。この母子融合は、「子どもの肥大した万能的自己像と「母親の理想化されたイメージ」の二つのイメージのつながりからなる。

ほぼこの時期は生後15カ月—18カ月のころと推定されるが、実際に1歳半ごろの子どもは、母親への独占欲が最も高まる時期である。その状態が、子どもの自己愛をはぐくみ、居心地がよいだけに、この時期に固着しやすい危険があるが、母がいつも子どもの欲求をみたしてくれる理想的環境においてくれるわけではない。母親への失望をくりかえしつつ、子どもは現実的な限界を身につけてくる。

この肥大した自己像は、自己コントロールの能力が形成され、子どもに「他者からながめられた自己像」が内在化することによって、徐々に他の自己像群と統合されていく。

3. まとまった自己像の経験、自己像の凝集性の維持

以上の、大きく三つの自己像は、一つのまとまりをもったイメージとして経験されるようになる。まず、母親からいつも満足を得ようとすると得られない、という葛藤を経験する中で、より実際の、現実に近い形で、一つの全体的な自己像がまとまってくる。

すなわち、自分に対して破壊的な対象が同時に、愛の依存の対象であることがわかってくる。この過程は自己像が一つのまとまりをもつために欠如できぬものである。

一方、排尿、排便の経験や、様々な感覚運動的経験をとおして、知覚と骨格—筋肉の協応関係がしっかり固ってくる。そして、身体各器官の様相が、自他の関係の特徴づけるモデルともなる。

たとえばエリクソンは、器官の様態と心理社会様態の対応をもとに、その自我発達段階の理論

をつくっている。ここでの器官の様態とはたとえば、「口唇—呼吸」という様相が、「得る、お返しに与える」心理—社会様態に対応するという考え方である（鍾1977）。

このように様々な自己像が一つの凝集した自己像（Cohesive Self Image）としてまとまることで、時間的空間的に一貫性をもった自己の感覚ができてくる。それは場所としての自己と、状態としての自己が一致するということである⁴⁾。

それとともに、自己の凝集性を保つために、必要な様々な過程が働きます（イド—自我マトリックス、現実吟味能力、葛藤外自由領域、言語化能力、種々の防衛様式、諸価値の内在化、などの自我機能である）。

一方で、各発達段階に固有の葛藤によって、自己の凝集性のバランスがときとしてくずれ、自己の凝集像から、いくつかの自己像が分離することがある。こうして分離した自己像が、力動的な無意識、あるいはコンプレックスとなって沈潜する。

以上のような、自己像の凝集化と断片化のくりかえしから、様々な自己像のブレンドのしかたに個人差がでてくる。「個性」がめばえてくる時期である。

4. 自己の凝集性が心的機能に統合的影響を与える。

さて、凝集化した自己像は、その中に秩序をつくっていく。様々な自我機能のシステムをもつ階層的秩序ができる。そこに、自己の起源の安定した場所を経験できる。

Mahler のいう分離—個性化の時期はこのころにおわりをつける。

この時期の自我機能として、とくに防衛機能は、内的経験に関してだけでなく、外的要因による葛藤に対して働くようになる。

フロイトのいう肛門期の課題にむかうころであるが、トイレトレーニングの成功失敗の経験が、子どもにとって、新しい自己の凝集の感覚をもたらす。母親のよい導きがあって、子どもに自分の身体をコントロールする喜びの経験が蓄積すると、自己に対する信頼感や、自己感覚の拡がりが出てくる。一方、コントロールの失敗の体験が、否定的感情にとまって蓄積すると、「恥」の感覚が発生する。

自己の感覚は、この時期の身体感覚、身体像の形成の中で、「自分がものに働きかけることができる」という有能感（sense of effectance）につながる。内発的な動機の結果、自分の意志と要求によって、外界をかえることができるという有能感が、自己信頼感をつくる。

自己の感覚の発達、有能感の発達と一致する（Broucek 1979）。Self の感覚が本当に成立するのはこの肛門期の時期であろう。子どもにとって、様々なできごとや過程を自分自身の中に起源をもつものとしてとらえるとき、それが自己の感覚の起源となる。

しかしまだ、この時期の有能感は、ほぼ魔術的な万能感に近いもので、その感覚は原始的自己感覚の核であるが、自己にとってすでに明確に定義された、一つの自己像というものではない。

以上をふりかえてみると、基本的には二つの領域が自己感覚の起源の中にあることがわかる。一つは、自己の身体像であり、もう一つは自己と対象との関係の中での自己像である。

自己像、自己表象は、最初は身体表象からなるといってよい。それも、一つは手指によってふれた自分の身体と、身体そのものの動きの二つの身体感覚が一つの自分の身体として形成されることが必然の過程である。

それには、自然に有能感の喜びがついてくるものであるが、分離一個性化の二つの時期（乳幼児期・青年期）は、ともに、自己と身体が分離してしまう危険がともなう。そういった場合、重篤な精神症状をきたすこともある。

一方、自己と対象の関係の中で、自己表象と他者表象が分化していく過程もみていかねばならない。この過程は一口に、自己と対象が認知的に分化するのではなく、自己表象と他者表象の分化の過程で、さけがたい葛藤が存在する。

内的対象はつねに自己感情に色づけされる。したがって、もし対象との経験が安定した有能感に裏づけされない場合、自分でないもの（not-me）に侵入されるという脅威感が強まる。

自己一対象が常に分化しているわけではなく、また、自己一対象の融合（fusion）がつねに、病的であるわけではない。現実原則として自己一対象の認知的分化が、強調されがちだが、生活のエネルギー源としての快感原則の充足経験はいつも必要である。その中で、自己の有能感にうらづけられた、自己一対象の感情的融合の状態は欠如できない。人が外界の脅威と内的衝動との葛藤から逃げこみ、生への回復をもたらしてくれる場合は、むしろこのような快感原則が支配している世界ではないか。

II. 自己の概念における形態（フォルム）の問題

I章では、自己の感覚の起源について、主に自我心理学、対象関係論の立場から、一つの筋道をたててみた。

さて、自己や自我の分化統合の過程を考える場合、その下位次元としての自我機能や防衛メカニズム、自我理想の内在化等を個々に細分化して考察する方向には限界がつきまとう。

そこで、自我心理学や対象関係論の中で、Whole Person としての Self の概念が導入されるのは必至のことである。システムとしての自己、機能する全体としての自己等の概念がこの領域で用いられてきたが、一つの形態（フォルム、ゲシュタルト）として自己をとらえることはできないだろうか？

筆者は、Self がフォルムとしての心理的構造をいかに分化していくか、という問題をここで考えてみたい。

1. 自己の知覚の枠組

フォルムとしての自己、あるいは Self におけるフォルム概念を問題にする場合、当然、ゲシュタルト心理学をもとにした、自己の知覚の枠組が必要となる。

自我心理学の領域では Spiegel が『自己、自己の感覚、及び知覚』（1959）を発表しているので、ここで紹介してみよう。

Spiegel は自己を一つの「枠組」（frame of reference）またはゼロポイントとして定義している。Spiegel はゲシュタルト心理学での「枠組」概念を拡張し、「Self が、特定の心的あるいは身体的状態のよりどころとする一つの枠組としてある」したがって「Self は心的構造からその統合として、出現したのではなく、独立の有機的原则をもつ一つの形態である」「それは、心的諸構造相互間の関係を形成する」ことを指摘した。

我々の知覚が様々な枠組をもとにして成立していることは、知覚の恒常性その他の、知覚心理

学上の事実をみれば明らかだが、内的な知覚においても我々は「枠組」をもつ。Spiegel は内的知覚のその枠組になるものを「自己」と定義した。

この枠組の発達の理解のしかた、たとえば身体の内軸は子どもにとって空間知覚の基本的枠組としてある、といった、運動感覚を含めた枠組の発生的な理解のしかたは、離人感、非現実感などの精神症状を理解するのに重要であると考えられる。

枠組としての Self の発達過程は、一言でいうと、混沌とした内部知覚から、一つの自己表象があらわれ、それが恒常的な枠組を形成する過程である。それを主導するのは、自我のオーガナイズする働きである。すなわち、自我が内的状態をより秩序だてていく過程である。

Self の枠組が恒常性をもつ条件は、一つには、一つの全体としての Self と、様々な自己表象群との間に恒常的な関係が量的に存在しているということ、その関係の他に、自己表象群そのものの恒常性と、枠組自体の恒常性がそなわっていることである。

このような Self の枠組の恒常性は、発達の節目で当然、動揺することがある。とくに、青年期のころは、色々な意味で、自己の枠組が変化するときであり、自己表象群の相互間の均衡が破れ、Self そのものが再構築されるべき時期である。

また、自己の枠組が変動するとき、自我機能が低下して、離人感が出現することがある。離人症は、その意味で、対象イメージの中で自我に受け入れられた部分と、好ましくない部分の葛藤である。とくに、身体的自己の否定が離人感をもたらす⁹⁾。

したがって、離人感からの回復の作業は、自己像の安定性、恒常性、均質性を回復させることだが、それは Jacobson (1964) の指摘のごとく、過去、現在にわたって慣れ親しんでいる様々な具体的対象に対する同一視の作業となる。青年期の心理的治療の過程で、New Object に慣れ親しむことが、技法的に重要な場合があることを思いおこさせる。

2. スピッツの自我形成理論

さて、フォルムとしての自己の形成をみていく手がかりとして、発生生物学、胎生学の形態形成の概念をかりて、精神発達に応用していく方法が考えられる。

Spitz (1959) は胎生学のオルガナイザ概念を精神発達の記述に適用し、「精神のオルガナイザ」(organizers of the psyche) という概念を提出している⁹⁾。

精神のオルガナイザの重要なものとして、以下の3つがあげられる。

1. 微笑反応の出現
2. 人見知り反応(8カ月不安)
3. 音声言語、身振り言語(No のしぐさなど)

1の微笑反応は生後3カ月の間に多発する反応の一つである。母親の周囲の愛情を触発するものとして、人間社会に肯定的な依存関係を求めるのに欠如できないサインともいえる。

このオルガナイザは、自他の対象関係の中で、自我の認知的分化のために重要である。

2の8カ月不安はスピッツが名づけたものとして著名である。周囲に対して、未知の人と、親しい重要な人との区別がつくということで、適切なリビドー対象の確立がこの時期になりつつ。

1の時期に比べ、8カ月不安それ自体は、社会的関係がより複雑になってきたということを示す。前の時期では自分と自分以外のものという区別しかできなかった子どもが、この時期になる

と、人の他に「もの」も分化してきて、三者関係の成立を準備する。

第3のオルガナイザの時期は言語の獲得の時期と重なる。言語はまた、思考過程や、精神的操作のための一つのオルガナイザともいえる。

スピッツは archaic な言語の形態は18カ月のころまで続くとみている。たとえば、「ママ」ということばは、「さみしい、おなかがすいた、こんにちは、(ケガをして) 痛い、楽しい」など様々な意味がその場その場でこめられている。

また、音声言語の他に様々な身ぶりがコミュニケーションの道具として用いられる。

とくに、15—18カ月のころにでてくる、「いやいやのしぐさ」(No-gesture) の獲得は精神発達の一つの大きな変化を示すもので、スピッツはこれを第3のオルガナイザの一つとした。

この時期のオルガナイザの役割は、対象関係を言語パターンの中で発達させるものであり、言語象徴の獲得をとおして、社会的関係の中での「自己」が出現する。

しかし、スピッツの考え方は単に以上の発達系列をオルガナイザ概念を用いて記述したということではない。

基本的に、心理的過程は生物学的原型をモデルにできるということが、スピッツの方法からよみとれる。図1はオルガナイザ相互間の関係と、発達の方向性を描いた模式図である。これを見ると、一つのオルガナイザから次のオルガナイザへ移るときに、円錐の底辺上のどの点からも発

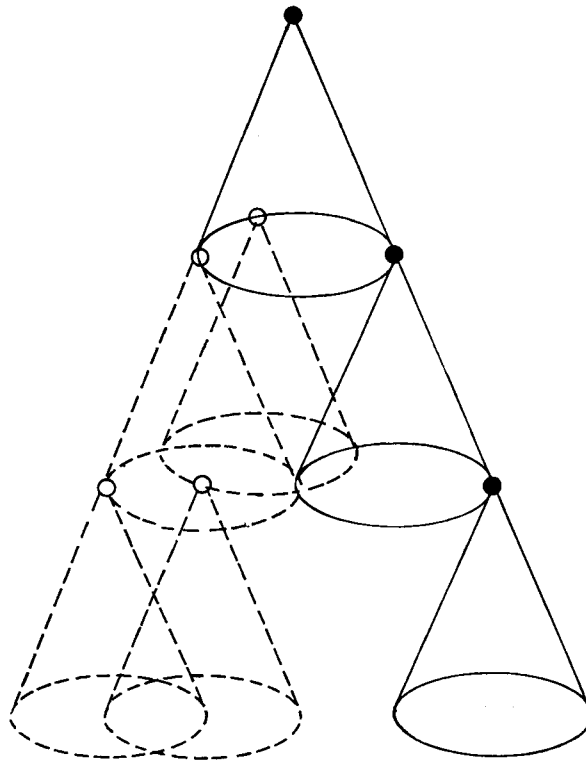


図1 オルガナイザ相互間の関係(スピッツ, 1959による)

達の可能性があるわけだが、特定のオルガナイザにより、その可能性が一つに決定されると、不可逆的であり、もとの段階にはもどれない。そういった積み重ねによって、発達の精緻な過程が構築されていく。この見方から「臨界期」という考え方が、心的過程にも成立しうることがうなずける。

また、そのような、発達の節目節目にオルガナイザの形成をよみとるという視点から、一つの行動から次の高次の行動の出現までの時間に個人差はあっても、発達の方向性そのものは、すでに決定していることがわかる。発達プロフィールが相互に似ているという見方ができる。このことは、精薄児その他の障害をもつ子の発達の位置と方向をさぐるのに、大きな示唆を与えらると思われる。

精神のオルガナイザの形成において重要な役割を果たすのは、emotion（情動）である。

各々のオルガナイザがでてくるときに、情動的な行動パターンの出現が観察される。たとえば、1の時期の微笑反応は、最初は原始的反射行動の一つとみられる。しかしこの反応も、社会的関係の文脈の中で、特有の感情的色彩をおびるようになる。感情的交流を周囲と保つことがいかに、人間の成長にとって必要なかわかる。

各々のオルガナイザの出現は、対象関係の変化をひきおこす。第2のオルガナイザ「人見知り反応」は対象をより明確化し、対象との強いつながりをもたらしためのものであるし、第3の言語活動によって、より広い社会的関係の中での自己一対象を外的にも内的にも構築していくことができる。

一方で、対象関係の変化は、常に情動的な性質をもつものであるので、それが各オルガナイザをひき起こすインディケーターとなる。

オルガナイザは心的構造が変化したもので、一つの実体ではない。オルガナイザがまたより複雑に統合された心的構造へと再構築を導入する、という形で進んでいく⁷⁾。精神のオルガナイザと、全体的な心的構造との相互関係は、発達の不均衡→均衡へのホメオスタシス仮説にのっている。とくに生後一年間の発達の不均衡の状態は、次のオルガナイザを形成する「はずみ台」になる。一度それまでの構造のもつ均衡をこわし、それをバネにして成長していく、という現象がみられる。

したがって、一見逆もどりしたようにみられる子どもの状態が、次の発達ステップを準備するという事実をよくみられる。

以上、自己におけるフォルム概念について二つの視点を述べた。ともに、あくまで理論的仮説にとどまるもので、「自己の形態形成」のより実証的な跡づけはできないものか、との問題点がある。とくに筆者が感じるのは、スピッツがオルガナイザ概念で生物学、胎生学をモデルにしながら、あくまで、理論的構成概念にとどまるという点に、ものたりなさを感じる。

また、各オルガナイザが、あくまで、社会的文脈、社会的関係の中の自己形成に偏しているようで、せっかく、胎生学をモデルにしながら、「形態」の変容過程をよみとるのはむずかしい⁸⁾。

そこでさらに、反射等の身体運動の原始的な行動観察から、自己の感覚の起源をとらえる必要がある。もちろん、スピッツらのグループはそれに気づいており、睡眠リズム、微笑反応、四肢の運動等の乳児の行動観察の中で、自己形成の「原型」(prototype)をとらえようとしている。次章でくわしくみてみよう。

III. 精神の形態学の試み

元来、精神に形態なるものはないのかもしれない。むしろ、人間の精神は、安定の基盤となる「形態」を求めてさまよう姿なのかもしれない。ノエシス→ノエマという、精神の志向性という根本的なありさまが指摘されるように、自ら安定した「形態」が欠如しているというところに、自己意識の意識たる由処があるのかもしれない。

以上のことを念頭において、しかし、自己の原初形態に、探索の手をのぼしたいものだ。

以下に、乳児期から胎生期にさかのぼって、よりプリミティブな身体の運動、反射、リズム等の形態変容の過程に着目し、自己の起源の手がかりを求めたい。

1. 行動の内発的リズム性への着目

スピッツのグループも、自我機能や防衛メカニズムの生理学的原型を、乳幼児の行動観察によって調べている (Spitz 1961, Spitz, Emde, and Metcalf, 1970)。とくに、睡眠のリズムと微笑反応が生後3カ月の間にどのような変容をみせるかに注目し、表1のような結果をまとめた。

その結果、スピッツらが力説しているのは、生得的な生理学的過程が、心理的過程の原型 (prototype) になる、ということである。

生得的なものといっても、心理的な活動性とか、機能、構造などは決して、生得的なものではなく、後天的と考えられる。本来、生得的なのは、一つに、学習と適応への様々な「能力」であり、もう一つは、環境に適応するために、神経生理学的、形態学的な所与を活用する「能力」な

表1 新生児の睡眠パターン・微笑反応などの変化 (スピッツ, 1959)

	0—6週	6—10週	10—12週
REM状態	閉眼時、仮眠状態、お乳を吸っているとき、四肢の運動、泣いているときなどに生じる。 〈生得的なパターン〉: 眠りは一つのREM状態からはじまる。	仮眠、吸飲、四肢の運動、泣いているときに生じるのは徐々に減少してくる。 生得的なパターンは継続する。	仮眠状態でのみあらわれる。また生理学的観点からよりパターン化される。 生得的なパターンは消失する、「成人」の睡眠パターンが顕在化する。
脳波	脳波の周期的な活動性は4—6週間でオーガナイズされる。4週間以前では、紡錘状の脳波は生じない。5—7週の間には紡錘状の波があらわれる。	脳波の周期的な活動性は「浅い」眠りと「深い」眠りの間では未分化、脳波の紡錘状はよりはっきりしてくる。	紡錘状の成熟した脳波があらわれる。「浅い」眠りと「深い」眠りの間で脳波のパターンは分化する。
微笑	〈内因性〉: REM睡眠の間に生じる。また仮りのREM状態 (約100分に11回の割合) でも生じる。 〈外因性〉: 十分な覚醒状態で不規則に反応する; 視覚、聴覚、嗅覚、身体運動の様々な感覚の刺激によって広く引き起こされる。	同様の割合かそれ以下の割合で生じる。 頻度は増大するが、まだ不規則であり、不特定の感覚刺激に対して反応する。	内因的な微笑は減少する。 「基本的な形態」に対して規則的な反応が生じる。
はしゃぎ (Fussiness)	空腹でない状態での内因的な四肢の運動は、この期間の後半にあらわれる。 (3—6週)	空腹でない状態をひきのばすと四肢の運動は出現するが、間欠的になる。	空腹でない状態をひきのばしても、四肢の運動は消失する。

のである。前節で述べた、心のオルガナイズも、けっして生理的な構造でも、心理的な構造でもない。心的所与の様々な過程の一つのあらわれであり、あるオルガナイズがより高次の環境適応へむかって、次のオルガナイズを準備する、という具合にすすむ、プロセスなのである。

生得的に与えられた、環境適応への能力、とくに、神経生理学的な行動パターンに、自我の核(ego nucleus)の生理学的原型をよみとることができないだろうか。

表1でみられた結果について、スピッツは REM 睡眠と微笑反応の関係に留意している。成人の REM 睡眠と比べ、新生児・乳児の REM 睡眠は拡散的で、不規則なあらわれ方をみせる。しかし、乳幼児期のある時期に、この REM 睡眠が必ず、成人の型と同じパターンをもつようになる。この時期に対象関係が成立するのではないか。すなわち、REM 睡眠と NREM 睡眠の反復パターンは、微笑反応が出現したところに、整ったものとなる。そのことが、心理発達の第一のオルガナイズの出現を示す、明らかな指標になるのでは、とスピッツは結論づけている。

さらにより、心理生物学的(psycho-biological)な立場から、発達神経学(1969)を提唱した岡田は、新生児の行動観察をとおして、意識水準と行動との関連にまず着目した。そして、睡眠状態の規則性、不規則性と、呼吸、身体運動などのリズム性との関連から、意識水準の安定性、外界に注意がむかっていく過程がどのように形成していくのか、説明を試みた(岡田1971)。

また、新生児の抱きつき反応、呼吸、吸飲反応などのもつリズム性は、外的刺激からではなく、内的行動によって喚起される行動のリズムである。そこに、プリミティブな精神活動の原型を認めることができよう。

そして、発達の基本的な特徴は、行動が一定のリズム性を失っていくところにある、と想定できる。

たとえば、2カ月以前の乳児の alertness(注視)の現象は、乳児の四肢の運動が静止したときに保持される。そのころの子どもは、静止状態においてしか、alertness をもつことはできない。その後1~2カ月を経て、四肢を動かしながら視線をおうことが可能になり、このころから、人の顔をみてははっきり、smile することができる。対象認知—ゲンタルト認知の萌芽がはっきり認められるのは、生後3カ月ごろである。スピッツらの研究と同様、「対象関係の成立⇔微笑反応の出現」という関係がそこから裏づけられる。

以上のような資料から考えると、「自己」の萌芽は、微笑の交りを出発点とする対象関係の成立と、それを準備する身体の内発的なリズム性(抱きつき反射、吸飲反射、呼吸、睡眠—覚醒リズム等)の変容を基盤にしていることがわかる。そして、内発的に調和したリズムがむしろこわれたときに、意識の状態が覚醒するというのはおもしろい。

行動の中にみられる周期的なリズム性というのは、新生児・乳児期に顕著だが、後々の人生にも、様々なかたちであられるものである。たとえば、林(1973)は、3歳児の行動を綿密に観察し、その行動の軌跡、移動量の変動、対人対物関係の時間的变化、発話のリズム性等に注目した。その結果、3歳児の行動には自己固有のリズムがあり、それが社会的適応行動の一つの様式になっていること、自己中心的とみられる子どもの行動のリズムが、現実への適応行動としてむしろ積極的な意味をもつ、と林は述べている⁹⁾。子どもは、自分のもつ固有のリズムをくずし、他の動きに、自分の動きをあわせることができるようになると、他者を含めた生活空間の形成が

可能となる。

この事実をさらに、病理的な視点でとらえてみれば、自閉症児や、分裂病患者の常同行動のもつ、形態やリズム性が、環境からの脅威から自分を守る防壁であると考えられると同時に、外界、環境適応への積極的な意味をそこにみることも可能ではないだろうか¹⁰⁾。

2. 身体図式への着目

身体運動のよりプリミティブな特性を手がかりに、自己の形態学的な起源をさぐるにあたって、もう一つの着眼点は、姿勢や動作などの図式的・形態的な側面である。

これについては、ワロンやピアジェの身体運動論、身体図式の考え方が参考になる。

ワロンは「幼児における自己身体の運動感覚と視覚像」(1954)という論文で、乳幼児の精神発達の過程の中でとくに、体感や身体の視覚像に注目した。そして、「身体の様々な部位、様々な姿勢や移動、その運動や姿勢をつくり出していく潜勢的な力に対応する、潜在的なイメージ」を身体図式(shéma corporel)とよんだ。

ワロンは身体運動を精神活動の基礎として非常に重視している。身体運動を大きく、3種にわけて、

- 1) 受動的・外的運動——重力に反応してあらわれる平衡反応。
- 2) 能動的・自発的運動——外部の環境に働きかける運動・移動と把握が中心。
- 3) 心理的性格をもつ運動——身ぶり、態度、表情など、身体言語的活動。

この3種の運動は相互に影響しあっている。それぞれの運動は筋トーンスによって支えられていて、姿勢の維持や情動生活にも関係する。

ワロンは、情動と筋肉の動きをつねに関連づけて考えている。その情動—身体運動の発達を支える感覚は、内部感覚(内臓感覚)、自己受容感覚(平衡、姿勢に関する感覚)、外部感覚の三つの感覚にわけられる。

内部感覚の中でも、呼吸は言語活動や、身体運動の感覚を整える意味で重要である。また自己受容感覚は、姿勢や自分の身体のイメージを形成するのに重要な面を担っている。

身体図式が成立するには、運動感覚領域と視覚領域とのあいだの緊密な結合が前提である。そのつながりが、最も基本的な精神—運動的活動にも、自他の分化の過程にも前提となっている。身体図式は、実際上の身体をともなった行為と、意識やイメージの中での行為の両者の統合の上に成立するわけで、また一方で、両者の行為のどちらにとっても必要不可欠である¹¹⁾。

自己意識の形成過程についてワロンは、とくに子どもが、自己の「鏡像」を他者の中にみる、という特徴に注目している。

実際に、子どもは自分の鏡像を自分だと認めることができるには2歳か、それ以上の年齢までまたねばならない(百合本1982)。また、子どもは多少とも新しい状況におかれたとき、おとなの反応の中にその状況の意味をよみとり、それによって自分も行動しようとする。子どもは自己の運動感覚を他者にあてはめると同時に、他者から視覚的な印象を受けとる。そこで共通の状況にあうと、他者のなかにみた効果を自己に帰する。こうして子どもは、自分自身についてのより客観的な意識をもち始めるようになる。

このように、自己が他者の中に反映し、他者が自己の中に反映する、という、自—他の二重の

反映が、自己の感覚の出現に必要である。

以上のように、身体図式はしばしば、視覚像として修正されて、自己の中に統合される。人は常に、自分自身のみかけの様相に再適応していく努力を重ねている。発達的には、身ぶり模倣などが頻繁に行なわれ、感覚運動的なものから、象徴的なものへの移行の道具に模倣が用いられる時期が、とくに重要である。

山口（1981）はこの時期の子どもたちの、認知の図式的（figuratif）な側面に注目し、子どもの行為障害を、身ぶり模倣の検査によって把握する試みを行なっている。認知の図式的側面とは、事物の形態そのものに密着したままで、主体にとっては現実の「写し」のようにみえる認知様式である。

いわゆる前操作期の段階（2歳～7歳ごろ）で、最終的に子どもが自分のむかいあった人の左右を正しく答えられるのが、8歳ごろである。それ以前は、むきあった検査者の身ぶりを鏡像的に反応することしかできない。示された身ぶりの逆をする、という可逆性の能力はまだ身についていない。

行為や身ぶりが空間的心像のなかで、変換可能なものとなることが、身体的自己の統合への道である。そのとき先にのべたように、他者から自己、自己から他者へと移行可能な身体表象へと自己の運動を統合していくことが可能となる。

また、身体自体は動くにもかかわらず、自分の意図したとおりに動かせない、という行動障害、たとえば、脳性マヒなどの肢体不自由児について、成瀬（1980）は、彼らの特徴をのべる中で、「身体運動と、心理的な過程としての動作を区別して考えた場合、脳性マヒ児は、自分の動作が意図した運動パターンとは食いちがってしまうところに、問題がある。」とのべている。

成瀬はその原因を、新生児型の運動パターンから正常成人パターンへの移行の不全、と考えている。たとえば、新生児緊張や、姿勢のGパターンといわれる、新生児型の動作パターンがのこっていて、緊張を自分から解いていくことができないのが、脳性マヒの状態である。

この場合も、先にのべた「身体図式」の二重性が解離してしまった状態と考えられる。

ワロンの感覚運動と視覚の統合過程をもとにした「身体図式」の考えは、「自己」の感覚の起源をさぐる上で、きわめて重要な示唆を与える。とくに、身体図式の基礎として、姿勢や運動形態が重視されていることに、注目したい。

身体の運動はその原初の形では、先にのべたように外界や対象の認識手段でもある。目や口、手、すべてが外界探索の手段となる。歩行までの段階でも、全身的な姿勢活動が、そのまま、「象徴機能としての行動」となる。なぜなら、この時期の身体運動や姿勢は、主体の目ざす意味が、運動そのもののうちに表現されているからである。

自己の起源をさぐっているうちに、象徴機能の原初形態としての「姿勢」や「身体一運動」というところまで話がすすんできた。

飛躍をおそれずにいうと、「精神の形態学」と名づけた領域が、このあたりからおぼろげながら、うかんでくるのである¹²⁾。

そこで、最後に、身体一自己の原初形態について、胎生期の次元にさかのぼり、そこから、心理的過程と象徴機能としての身体運動の同型性（isomorphism）をさぐる手がかりをつかみたい。

3. 行動の胎生学

先に、スピッツの自我形成理論が発生生物学のオルガナイザの概念をかりていることを指摘した。それはしかし、あくまで理論的構成概念としてであり、そこに心身のうめがたい二元論の溝が感じられる。

筆者はこれまで、身体運動の形態の変容の中に発達原理をよみとり、その過程を記述することがそのまま、自己の起源を語ることになるという道をさがしてきた。ここで、さらに胎生期の中に、自己の発生モデルを見出すことはできないだろうか。

以上の問題について、ゲゼルの「行動の胎生学」(1978)をもとに論じたい。

まずゲゼルは行動の体 (corpus) という考えを提出する。行動の体の中心は、「有機体の永遠の進化過程の中で徐々につくりあげられ、人間の個体発生の中に再び出現する、古代からの運動組織」である。それは、胎児や乳児に、子宮内外の両方の環境に対して、運動形態として適応する枠組を与えるものである。それは、姿勢、移動、把握、操作などの一次的な型を与えるものである¹³⁾。

図2は、ゲゼルの考え方をもとに、新井(1978)が、行動の体が実体化していくプロセスを描いたものである。a. b. c. のように、底にあっていまだ生れてこない行動が、次第に ab, または abc, というように相互に合体していきながら形をとり、水面にうかびあがったときに D という一つの行動の型が出現する。その模式図である。

たとえば、a の傾向は首がすわることと同じ意味かもしれない。とすれば、b は坐位の制御、c は葡萄く (はいはい)、d は直立姿勢、D は歩行、という流れになる。また、a が横隔膜の最初の収縮と考えると、D は最初の発語行動につながる。

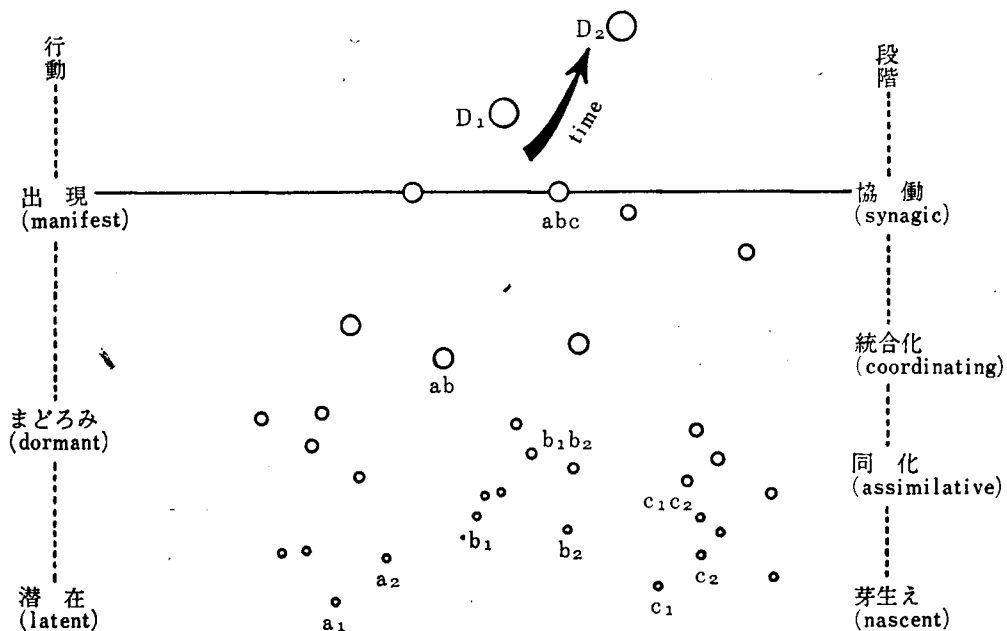


図2 行動の体 (corpus) の実体化 (consolidation) のプロセス (新井, 1978)

行動の形態発生のしかたは、一直線ではなく階層的な秩序をもち、しかも、らせん的 (Spiral) な成長の方向性を示す。たとえば、表 2 のように、把握の発達を四つの段階にまとめることができる。

生体には内在的な形態発生の力がある。それは、胚発生、胎生期の段階から、環境との相互作用によって引き出され、個別化の道をすすめる¹⁴⁾。

また、ゲゼルはワロンらの身体図式の考え方と同様、姿勢 (posture) に注目し、姿勢の起源を、魚類、両生類にいたるまでさかのぼり、古代の運動形態の内在化を人間の胎生期、乳児期の中によみとっている¹⁵⁾。

ゲゼルは「行動の胎生学は姿勢という言葉で一括できる」と述べている。姿勢とは、身体全体または四肢によって運動したり、または、ある姿勢を保持するためにとる位置づけ (position) である。動作 (action) は姿勢を前提として考えられ、一つの動作は各瞬間の姿勢の集合である。

そういう意味で、統一的な活動組織はすべて、姿勢という機構をもっている。

心の発生学は姿勢行動の初めを探らねばならない。姿勢の起源をたどると、生物の種属の歴史の中で最も古い筋肉 (体幹、胸筋、骨盤帯の筋肉) のうちに潜むと考えられる。

図 3 は、Coghill が山椒魚 (*Amblystoma punctum*) の遊泳反応の観察によって、動作の型を分類したものである。それぞれの型はまた、古代の個体発生段階の順序に相当している。原始的な脊椎動物と同じく人間においても、姿勢行動はこのような「圧縮した発達の法則」を示すとゲゼルは考えている。

人間の古代の運動系としてのこっている姿勢の型は、以下の 3 つの姿勢反射にわけられる。

1) 態度反射 (attitudinal reflexes) —— 生物を正しい態度に保つ、とくに重力が基本的な方向づけを決定する。

表 2 把握の形態発生 (ゲゼル, 1978 による)

I	四肢一芽状突起 (limb-bud) 段階 胎児年齢: 5 週	指 の 放 線 胎児年齢: 6 週	反 射 的 把 握 胎児年齢: 12 週
II	眼 球 固 定 胎児後年齢: 1 週	手 を な が め る 年齢: 12 週	小 球 を な が め る 年齢: 16 週
III	徘徊して近づく 年齢: 24 週	粗大な熊手型つまみ方 年齢: 28 週	橈骨側の熊手型つまみ方 年齢: 32 週
IV	鉗 型 の 把 握 年齢: 36 週	(たくみな) ピンセット型把握 年齢: 48 週	たくみなはなし方 年齢: 15 カ月

* 小さな砂糖で出来た粒、直径 7mm、把握をひきおこす刺激物。
微細把握の発達における 4 主段階。

- I. 身体的一触覚的
- II. 眼 球
- III. 手
- IV. 指

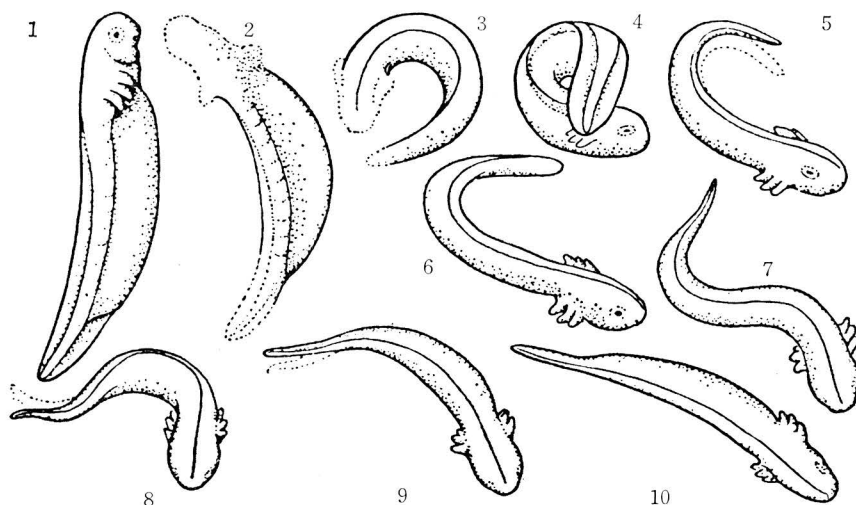


図3 山椒魚の游泳型の諸成分。10段階を順序を追って3/5秒間画いたもの。5—10の段階ではその体長だけの距離を前進する。全段階は古代の個体発生段階の持続的な順序に相当している。（ゲゼル、1978による）

2) 正位反射 (righting reflexes) ——正常の方向づけを失ったときに、生物を正しい態度にもどす。

3) 静止（平衡）運動反射 (statokinetic reflexes) ——生物を正しい方向に保持する。

この中でとくに1)の態度反射が重要である。この姿勢は、すべてに遍在する刺激である、「重力」に対する基本的な対処の型を決定するものであるからだ。ごく初期の人の胎児でさえも、屈筋、伸筋へ緊張性の態度反射が走る、という事実が観察されている。

結 び

「自己」の起源をさぐるということを目標に、対象関係論や自我心理学の Self 形成理論から出発し、発生生物学のオルガナイザ概念、身体図式、姿勢反射の問題あたりまで、長々と叙述してきた。その中で、心と身体の接点をさぐる手がかりのようなものが得られれば、と期待しつつ、胎生期の原始反射、姿勢保持の状態にまでさかのぼった。

筆者の手もとには具体的資料はない。飛躍にすぎる危険性は十分承知しながらも、筆者がこのような問題をここで提出したかったのは、日常の心理臨床実践の次のような問題意識からくるものである。

たとえば、自閉症の子どもが治療過程の中で、それまでかぜなどひいたことのない子が、かぜをひいて休む、そのあたりに病相の好転機が存在する、ということは事例検討の場でよく指摘される。また、神経症の人に自由な呼吸やからだの動きを行なうことが困難な人が多いし、神経症ではなくとも、様々な姿勢、動作が身体言語という形で、その人の心の状態を伝えていることは、

よく気づくことである。そこから逆に、身体に身についたクセを自覚し、「筋緊張のよい」を解放して、情動の解放にいたる、ライヒやローウェンの技法がでてくる。

さらに、心身症患者によくみられるようだが、箱庭や描画作品の中に、病者の身体的異和感が投影されることもよく指摘される。

このような、心理的過程と身体運動の形態的な類似性について、病理的、発生的な視点からどこまでとらえることができるか。対象関係論の文脈では、身体自我といった仮説的概念にもとづいた理論化が行なわれてきたが、乳幼児期さらに胎生期の姿勢、動作、行動リズムの中に、自己形成の「フォーム」というものが見出せないだろうか。そこでたどりついたのが、象徴機能としての身体運動、身体図式という考え方であり、行動の胎生学であった。

ゲゼルは「行動の胎生学」で次のようにのべている。「乳児は身体として生れてくるのと同じ仕方で、その心も生まれてくる。」「心の胎生発生学を知ろうとするなら、胎児や乳児の姿勢行動を解明せねばならない。」

また、「ヒトの心は動き以上のものでも以下のものでもない」という記述が同書序文にみられる。

筆者はゲゼルのこのような考え方から、「精神の形態学」というものが可能ではないか、と夢想している。これについては稿を新たにしてみたい。

ただ本稿では、行動の内発的な形態形成に重点がおかれ、環境と自己との相互関係、とくに母子の間にかわされる初期経験（触覚や視覚刺激の接触、ことばや声のリズムへの同調、においや暖かさの交感等）の重要性については十分ふれえなかった。自己の形成過程を述べるのに「身体性」の側面とともに、この「関係性」の側面は無視することはできない。たとえば、胎生期に注目する場合でも、胎児はすでに8週間目ごろに、皮膚刺激を受けると、体を彎曲して明らかな反応を示す、という事実がある（モンタギュー、1977）。このように、皮膚触覚が関係性の中での自己形成にもたらす意味は、奥深いものがある。

以上のような、精神発達の社会的な原初的経験の重要性をも含めて、これからさらに、考察を深めていきたい。

注 釈

- 1) 最近のレビューとして Redfearn 1983 のものがある。
- 2) これについては Elkind らのグループが、Personal Fable(個人的寓話)、Audinary Imagination (聴衆の想像化)、Self-Focus (自己への集中)、などの特徴をのべている (Elkind, D. 1967, Enright, R. D. et. al. 1979)。
- 3) だれしもが、自己愛的自己をもっているが、それが肥大するとまったくの幻想世界の中に没入してしまう、病的な性格障害におちいる。そのような肥大した幻想を自我の現実的目的の中に統合することによって、自己愛のバランスを保つ。人はそうして健康性を保っているのである。
- 4) このような過程はまた青年期でもくりかえされる。すなわち、Identity の形成過程(自分の Sameness の感覚)でまさに、自己のまとまりをつくっていく作業を行なう。
- 5) 筆者の症例報告 (1979) と氏原のコメントを参照してほしい。
- 6) ここでオルガナイザとは、形成体、誘導体と訳され、卵細胞の形態発生の観察で「卵細胞の初期に部分的に細胞を破壊しても、動物は小型になるが、完全な形態をそなえたものに成長する」という事実がある。

たとえば、「細胞分裂が blastula (胞胚) の時期から gastrula (腸胚) の時期に達すると、後者に変化した前者の部分は、もはや融通性を失って、独特の機能を獲得するようになる。」この部分を別の胚細胞中に移植しても、「それは当然原組織の中において、発育したであろう同じ形態をとる。」のみならず、それはその別の胚細胞に働いて、自らの発育に適応するように組織化する。

このように、個体発生の各段階において、次の形態形成を誘導していくような中心となる部分をオルガナイザとよぶ。図4のように、とくに原口を囲む壁の背側部(原口背唇)は、個体発生の中心をなしている。これを最初のオルガナイザとよんでいいだろう (Spemann 1938, Needham 1931)。

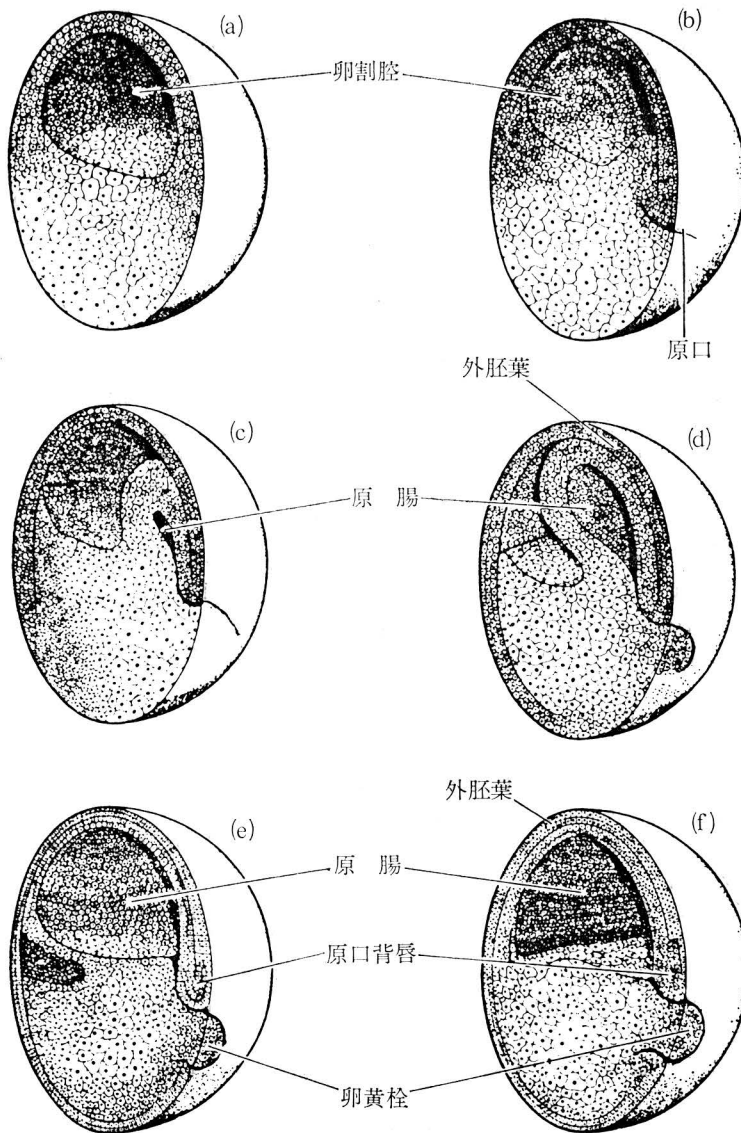


図4 両生類の神経胚形成の過程
(小林英司編：発生と形態形成，東海大学出版会，1980)

- 7) Self が ego の活動性のための一つのオルガナイザとなる、という関係が考えられる。斉藤 (1981) の「自我動機としての自己」という考え方に繋がっていく。
- 8) もともとフロイト自身が力動的発達理論構築にあたって、発生学をモデルにしたのは周知のとおりであるし、エリクソンの発達段階説も、胚 (embryo) の成長過程のアナロジーである。このように、胎生学を心の発生、心のモデルに用いることが可能なのは、形態 (フォルム) の維持とその変容の系列が明確に例示しうるからである。
- 9) Thomae, H. も 5 ～ 6 歳の児童の行動や対象選択の中にはっきりしたリズム性を認めている (岡田 1969)。
- 10) 渡部 (1981) の慢性分裂病患者の常同円環運動についての考察が参考になる。
- 11) この運動感覚—視覚の二者間の領域の結びつきがこわれた状態として、成人でも、自己像幻視、自我の分離体験などの病的体験や、夢や空想の中に、そういう状態をみることができし、子どもの場合、とくに空想が自分自身におこったことか、他人におこったことか、現実の記憶が混乱することがよくある。
- 12) これについて、筆者は以前に、「かたち」の生成と変換というエッセイをしたためたことがある (森岡 1982)。
- 13) 乳幼児のいくつかの「行動の型」は序列をなす。その序列を胎生期から継続してとらえる考え方が「行動の体」である。一定の年齢に特定の行動の体が集中してあらわれる。生得的図式やオルガナイザと共通する考え方であろう。たとえば、表 2 のような「把握」行動の系列図式を参照されたい。
- 14) 胚発生の段階から環境に対する調整がある。胚発生の過程はその初期条件にしたがって、一定のコースが決定されるが、それは遺伝子間の相互作用によって、ホメオレシス (補整作用) がはたらくからである。
- 15) 同様の考え方は、三木 (1982, 1983) の発生形態学をはじめとして、香原 (1982) や近藤 (1982) などの人類学、比較行動学やポルトマン (1976) の生物学などにみられる。
また、胎生期の中に発達の階層秩序をよみとる、田中 (1980) の考え方も参照したい。

引 用 文 献

- 新井清三郎 1978, 行動と発達——A. Gesell の研究をめぐって——小児の精神と神経, 18, 58-71。
- Bonnard, A. 1958, Pre-Body-Ego types of (pathological) mental functioning, *Journal of American Psychoanalytic Association*, 6, 581-611.
- Bonnard, A. 1960, The primal significance of tongue. *International Journal of Psychoanalysis*, 41, 301-307.
- Broucek, F. J. 1979, The sense of self, *Bulletin of Menninger Clinic*, 43, 85-90.
- Elkind, D. 1967, Egocentrism in adolescence, *Child Development*, 38, 1025-1034.
- Enright, R. D., Lapsley, D. K. and Shukla, D. G. 1979, Adolescent egocentrism in early and late adolescence, *Adolescence*, 14, 687-695.
- ゲゼル, A. 行動の胎生学 (新井訳) 1978, 日本小児医事出版 (Gesell, A. The embryology of behavior, 1945, Harper)。
- Greenacre, P. 1958, Early physical determinants in the development of the sense of identity, *Journal of American Psychoanalytic Association*, 6, 612-627.
- 林 邦雄 1973, 3 歳児の行動のリズム, 児童精神医学とその近接領域 14, 96-107。
- Jacobson, E. 1964, The self and the object world, International University Press.
- 香原志勢 1981, 人体に秘められた動物, 日本放送協会。
- Kohut, K. 1971, The analysis of self, International University Press.
- 近藤四郎, 1982, 足の話, 岩波書店。
- Lichtenberg, J. D. 1975, The development of the sense of self, *Journal of American Psychoanalytic Association*, 23, 453-484.
- 三木成夫, 1982, 内臓のはたらきと子どものこころ, 築地書館。

森岡：自己の感覚の起源について

- 三木成夫, 1983, 胎児の世界, 中央公論社。
- モンタギュー, A. 1977, タッチング (佐藤訳) 平凡社。
- 森岡正芳, 1979 a, 離人的訴えをもつ高校生の事例, 京都大学心理教育相談室紀要, 臨床心理事例研究 6, 147-156。
- 森岡正芳, 1979 b, 青年期の自我発達理論に関する統合的展望, 京都大学学生懇話室紀要, 9 (別冊), 19-42。
- 森岡正芳, 1981, 青年期における自己認知の発達——自己中心性との関連性——, 京都大学教育学部紀要, 27, 182-193。
- 森岡正芳, 1982, 試論「かたち」の生成と変換——象徴の意味回復への模索——, アーユルヴェーダ研究, 12, 104-131。
- 成瀬悟策, 1980, 肢体不自由児における発達障害, 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), 25, 15-20。
- Needham J. 1931, *Chemical embryology*, Macmillan.
- 岡田幸夫, 1969, 発達神経学, 児童精神医学とその近接領域, 10, 321-335。
- 岡田幸夫, 1971, 内因性精神病理解のための発達の観点, 精神医学, 13, 1001-1008。
- ポルトマン, A. 1976, 生命あるものについて (八杉訳), 紀伊国屋書店。
- Redfearn, J. W. T. 1983, Ego and self: terminology, *Journal of Analytical Psychology*, 28, 91-106。
- 齊藤久美子, 1981, 人格の統合動機について——「自我動機」の観点からみた「自己」京都府立大学学術報告「人文」, 33, 92-105。
- Spemann, H. 1938, *Embryonic development and induction*, Yale University Press.
- Spiegel, L. A. 1959, The self, the sense of self, and perception, *Psychoanalytic study of Child*, 14, 81-109。
- Spitz, R. A. 1957, No and Yes, International University Press.
- Spitz, R. A. 1959, The genetic field theory of ego formation, International University Press.
- Spitz, R. A. 1961, Some early prototypes of ego defenses, *Journal American Psychoanalytic Association*, 9, 626-651.
- Spitz, R. A., Emde, R. N. and Metcalf, D. R., 1970, Further prototypes of ego formation, *Psychoanalytic study of child*, 25, 417-441.
- 田中昌人, 1980, 胎生期の発達における階層の概念の導入について, 「人間発達の科学」青木書店。
- 鎗幹八郎, 1977, 精神分析と発達心理学, 村井潤一郎編「発達の理論」ミネルヴァ書房。
- ワロン, H. 1981, 幼児における自己身体の運動感覚と視覚像 (百合本, 浜田訳), 発達, 8, 112-119, (Wallon, H. 1954, *Kinesthésie et image visuelle du corps propre chez l'enfant*, *Bulletin de Psychologie*, 7.).
- 渡辺哲夫, 1981, 精神分裂病性経過に現われる円環状常同運動の精神病理学的考察, 精神神経学雑誌, 83, 333-356。
- 百合本仁子, 1981, 1歳児における鏡像の自己認知の発達, 教育心理学研究 29, 261-266。

(本学部助手)